

## 飼料イネに関する耕種及び畜産農家へのアンケート調査

矢内清恭

(福島県畜産試験場)

Questionary to Cultivate and Cattle Farmers on Their Choice of Whole Crop Rice Silage

Kiyotaka YANAI

(Fukushima Animal Husbandry Experiment Station)

### 1 はじめに

米の生産調整面積及び耕作放棄地は年毎に増加し、畜産での利用が強く求められている。水田の機能を維持しつつ、既存の栽培技術や機械を利用し自給飼料の確保に結びつく飼料イネが、飼料生産基盤として定着するための要因、条件について明らかにするため耕種農家、及び畜産農家に対して飼料イネに関するアンケート調査を行った。

### 2 調査方法

#### (1) アンケート調査対象

ア 対象地域：県内全域

イ 対象農家及び戸数：(表1) に示す

区分	飼料イネの 取り組み	耕種農家 の別	配布戸数 戸	回収戸数 戸	回収率 %
1	無	耕種農家	372	160	43.0
2	無	畜産農家	420	196	46.7
		肉用牛	231	111	48.1
		酪農	189	85	45.0
3	有	耕種農家	67	33	49.3
4	有	畜産農家	36	17	47.2
全体			895	406	45.4

#### 農家選定

区分1：県内認定農家から、地域水田面積により案分

区分2：酪農、牛群検定実施農家

肉用牛、県内地域毎農家数案分

区分3、4：把握農家全戸

#### (2) アンケート用紙の配布及び回収

試験場から料金受取人払いの返信用封筒を同封し、農家へ直接アンケート用紙を郵送した。

#### (3) アンケート実施時期

アンケート用紙配布：平成14年12月25日

回収期限：平成15年2月14日

### 3 調査結果及び考察

#### (1) アンケート回収率

全体で895戸の農家にアンケート用紙を配布し、期限までに回収されたアンケートは406戸で45.4%の回収を得た。(表1) 区分1が43.0%、区分2が46.7%、うち、肉用牛農家は48.1%、酪農家は45.0%、区分3が49.3%、区分4が47.2%であり、いずれの区分も40%台で平均的に回収された。

#### (2) 飼料イネに対する認知度及び興味の有無

飼料イネに取り組んでいない農家(区分1、2)に対

して、まず問1「飼料イネを知っていますか」と質問したところ、「知っている」と答えた農家は、全体356戸の中で215戸、60.4%であった。

耕種農家、畜産農家別でみると、耕種農家が51.3%、畜産農家が67.9%と畜産農家の方が多かったが、さらに畜産農家を肉用牛農家と酪農家に分けてみると肉用牛農家は55.9%、酪農家は83.5%で酪農家の認知度は非常に高かった。(表2)

次に、問2「飼料イネに興味はありますか」と質問したところ、問1で「知っている」と回答した215戸中121戸56.3%が「興味がある」と答えた。

耕種農家では67.1%、肉用牛農家は62.9%と耕種農家に近かったが、酪農家は38.0%で認知度の割に関心は低かった。(表3)

酪農家は、毎日の集乳や酪農雑誌の購読等により、平均的に情報収集がされており、認知度が高いと考えられた。

#### (3) 飼料イネに対する興味の内容

さらに、「何処に興味があるか」を質問したところ、耕種農家では「水田のまま利用できる」81.8%、「耕作放棄地の解消になる」60.0%の理由が多かった。肉用牛農家では、「水田のまま利用できる」(56.4%)が多く、16頭以上規模の農家では「耕畜連携のメリット」(50.0%)や「飼料費の節減」(50.0%)も多い。

肉用牛農家の多くは水田も所有し、耕種部門も含めた経営形態が多く、質問に対する回答も酪農家より耕種農家に近い部分がみられたが、「飼料費の節減」など畜産農家特有の項目も興味を惹いていた。

酪農家では、「耕畜連携のメリット」(51.9%)、「飼料費の節減」(55.6%)が多く、特に規模の大きい農家ではこの2つが75.0%、87.5%と多く、飼料イネに期待するところは大きいものと考えられた。(表4)

#### (4) 飼料イネに取り組んでいない理由

「飼料イネを知っている」と答えた215戸のうち、121戸が「興味がある」にもかかわらず、取り組みに至っていない。そこで「飼料イネを作付けしない理由」調査したところ、耕種農家では、「利用供給相手が探せない」(41.8%)、「畜産農家との作業分担や調整が面倒」(38.2%)の理由が多かった。(表5)

また、酪農家の44%(特に31頭以上は87.5%)が「飼

料イネを栽培してくれる農家が探せない」を挙げていることから、耕種農家と畜産農家の間で調整を取れるような組織の存在が必要と思われた。

畜産農家では、肉用牛農家、酪農家ともに「飼料イネの飼料価値に疑問がある」(肉用牛 79.5%、酪農 66.7%)が多かった。過去にイネを飼料として給与し、食滞の原因となった事例があり、当時の記憶から懸念を抱く農家が多いようである。(表6)

(5) 飼料イネに取り組んでいる農家の反応

既に飼料イネに取り組んでいる耕種農家、畜産農家の次年度の作付けの意向は、50戸のうち、「増やしたい」11戸、「現状維持」33戸、「減らしたい」3戸、「止めたい」1戸、「無回答」1戸で、「増やしたい」と「現状維持」を合わせると44戸、88%を占め、取り組んでいる農家のほとんどが満足していると考えられた。(表7)

増やしたい理由としては、耕種農家では「転作作物として作りやすい」、「耕作放棄地の解消」、「耕畜連携のメリット」等理由は分散していた。畜産農家では増やしたいと答えた6戸全てが「飼料費の節減」を挙げている。実際に飼料イネに取り組んでいる畜産農家は飼料としての価値を認めていると考えられた。「耕畜連携のメリット」、「飼料価値が高い」、「転作作物として作りやすい」も半数以上が理由として挙げている。

4 まとめ

以上の結果から、耕種農家と畜産農家の間で調整を取れるような組織的な取り組みをし、飼料イネは適切な給与技術によって飼料として有効であり、安全であることを啓蒙していくことによって普及・定着が進むものと考えられた。

表2 問1 飼料イネを知っていますか？

	総数	はい	いいえ	無回答
全体	356戸	60.4%	32.9%	6.7%
耕種農家	160	51.3%	45.6%	3.1%
水田経営面積				
< 250a	41	34.1%	56.1%	9.8%
250 ≤ < 450	43	55.8%	44.2%	0.0%
450 ≤ < 700	37	45.9%	54.1%	0.0%
700 ≤	39	69.2%	28.2%	2.6%
畜産農家	196	67.9%	22.4%	9.7%
飼養頭数				
肉用牛農家	111	55.9%	33.3%	10.8%
1-5頭	33	48.5%	42.4%	9.1%
6-10頭	32	59.4%	28.1%	12.5%
11-15頭	29	79.3%	17.2%	3.4%
16頭以上	17	58.8%	29.4%	11.8%
酪農家	85	83.5%	8.2%	8.2%
1-20頭	34	91.2%	5.9%	2.9%
21-30頭	24	83.3%	16.7%	0.0%
31頭以上	27	74.1%	3.7%	22.2%

表3 問2 飼料イネに興味はありますか？

	総数	はい	いいえ	無回答
全体	215戸	56.3%	42.3%	1.4%
耕種農家	82	67.1%	32.9%	0.0%
水田経営面積				
< 250a	14	71.4%	28.6%	0.0%
250 ≤ < 450	24	54.2%	45.8%	0.0%
450 ≤ < 700	17	58.8%	41.2%	0.0%
700 ≤	27	81.5%	18.5%	0.0%
畜産農家	133	49.6%	48.1%	2.3%
飼養頭数				
肉用牛農家	62	62.9%	33.9%	3.2%
1-5頭	16	31.3%	56.3%	0.0%
6-10頭	19	47.4%	47.4%	5.3%
11-15頭	23	73.9%	21.7%	4.3%
16頭以上	10	80.0%	20.0%	0.0%
酪農家	71	38.0%	60.6%	1.4%
1-20頭	31	41.9%	58.1%	0.0%
21-30頭	20	30.0%	65.0%	5.0%
31頭以上	20	40.0%	60.0%	0.0%

表4 問3 飼料イネの何処に興味がありますか？

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
耕種 水田面積	55戸	81.8%	60.0%	47.3%	36.4%	23.6%		
< 250a	10	90.0%	70.0%	30.0%	0.0%	30.0%		
250 ≤ < 450	13	92.3%	53.8%	38.5%	53.8%	7.7%		
450 ≤ < 700	10	70.0%	50.0%	80.0%	30.0%	20.0%		
700 ≤	22	77.3%	63.6%	45.5%	45.5%	31.8%		
畜産 飼養頭数	66	65.2%	40.9%	53.0%	42.4%	28.8%	59.1%	33.3%
肉用牛農家	39	58.4%	25.6%	41.0%	23.1%	23.1%	35.9%	35.9%
1-5頭	5	80.0%	20.0%	40.0%	20.0%	0.0%	60.0%	60.0%
6-10頭	9	33.3%	22.2%	33.3%	44.4%	55.6%	22.2%	33.3%
11-15頭	17	64.7%	23.5%	58.8%	0.0%	11.8%	29.4%	35.3%
16頭以上	8	50.0%	37.5%	12.5%	50.0%	25.0%	50.0%	25.0%
酪農家	27	44.4%	37.0%	48.1%	51.9%	18.5%	55.6%	22.2%
1-20頭	13	69.2%	30.8%	69.2%	38.5%	23.1%	38.5%	23.1%
21-30頭	6	50.0%	50.0%	33.3%	50.0%	16.7%	50.0%	33.3%
31頭以上	8	0.0%	37.5%	25.0%	75.0%	12.5%	87.5%	12.5%

※ 複数回答

- ① 水田のまま利用できる
- ② 耕作放棄地の解消になる
- ③ 転作作物として作りやすい
- ④ 耕畜連携によりメリットが生まれる
- ⑤ 転作助成金の条件がよい
- ⑥ 飼料費の節減になる
- ⑦ 飼料価値が高い
- ⑧ その他

表6 問4 飼料イネに取り組まないのは何故か？

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
畜産 飼養頭数	66戸	74.2%	53.0%	21.2%	40.9%	30.3%	21.2%	4.5%
肉用牛農家	39	79.5%	51.3%	28.2%	38.5%	28.2%	5.1%	0.0%
1-5頭	4	80.0%	80.0%	40.0%	60.0%	100.0%	20.0%	0.0%
6-10頭	9	100.0%	22.2%	44.4%	44.4%	33.3%	11.1%	0.0%
11-15頭	17	70.6%	52.9%	23.5%	29.4%	17.6%	0.0%	5.9%
16頭以上	8	25.0%	75.0%	25.0%	50.0%	25.0%	12.5%	0.0%
酪農家	27	66.7%	55.6%	11.1%	44.4%	33.3%	44.4%	3.7%
1-20頭	13	69.2%	61.5%	15.4%	53.8%	15.4%	15.4%	0.0%
21-30頭	6	66.7%	66.7%	0.0%	50.0%	50.0%	50.0%	16.7%
31頭以上	8	62.5%	37.5%	12.5%	25.0%	50.0%	87.5%	0.0%

※ 複数回答

- ① 飼料イネの飼料価値に疑問がある
- ② 圃場条件が悪い
- ③ 粗飼料は十分確保できている
- ④ 收穫調整機械がない
- ⑤ 労力が足りない
- ⑥ 飼料イネを栽培してくれる農家が探せない
- ⑦ 耕種農家との作業分担や調整が面倒
- ⑧ その他

表5 問4 飼料イネを作付けないのは何故？

	①	②	③	④	⑤	⑥
耕種 水田面積	55戸	27.3%	41.8%	18.2%	38.2%	10.9%
< 250a	10	10.0%	30.0%	10.0%	40.0%	10.0%
250 ≤ < 450	13	30.8%	46.2%	23.1%	30.8%	15.4%
450 ≤ < 700	10	40.0%	30.0%	10.0%	50.0%	10.0%
700 ≤	22	27.3%	50.0%	22.7%	36.4%	9.1%

※ 複数回答

- ① 他の作物で転作が定着している
- ② 利用供給相手を探せない
- ③ 圃場条件が悪い
- ④ 畜産農家との作業分担や調整が面倒
- ⑤ 労力が足りない
- ⑥ その他

表7 次年度作付けの意向

	耕種農家 33戸	畜産農家 17戸	計 50戸
増やしたい	5戸 15.2%	6戸 37.5%	11戸 22.0%
現状維持	25 75.8%	8 50.0%	33 66.0%
減らしたい	1 3.0%	2 12.5%	3 6.0%
止めたい	1 3.0%		1 2.0%
無回答	1 3.0%	1 6.3%	2 4.0%

※ 複数回答

表8 作付けを増やしたい理由

	耕種農家 5戸	畜産農家 6戸
転作作物として作りやすい	3戸 60.0%	3戸 50.0%
耕作放棄地の解消になる	2 40.0%	1 16.7%
耕畜連携によりメリットが生まれる	2 40.0%	4 66.7%
復田が容易	1 20.0%	0 0.0%
飼料費の節減になる		6 100.0%
飼料価値が高い		3 50.0%

※ 複数回答